

体験グローバル 「企業調査（実地調査）」のアンケート結果

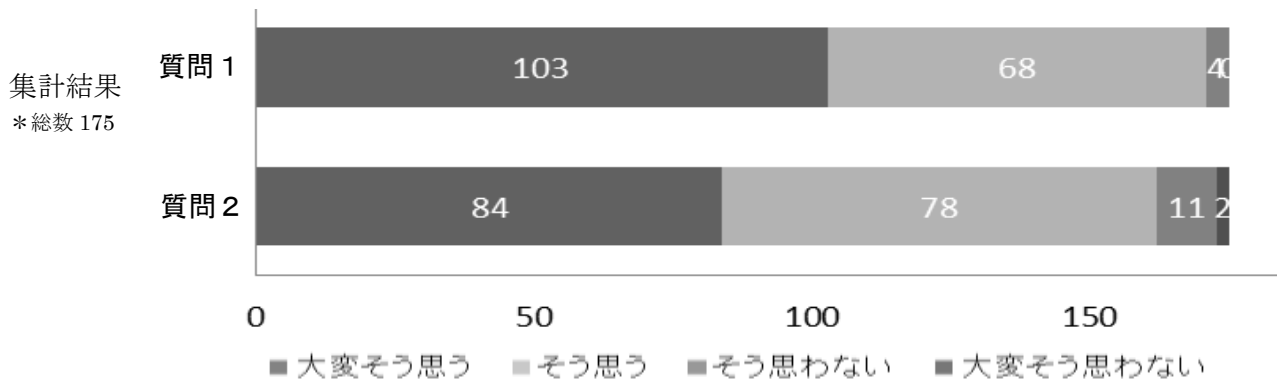
2016年8月24日に4年生全員を対象に、「グローバル社会での企業活動や地元産業についての研究を行う」ことを目的として実地調査を行いました。調査先は、ホーコス株式会社（本社・本社工場）、天野実業株式会社（R&D センター）、株式会社エフピコ（福山リサイクル工場）、ヒロボー株式会社（ライプファクトリー）、鞆の浦（対潮楼などの歴史遺産、地元産業）の5つで、課題研究班のメンバー5人が分担してそれぞれのコースに分かれました。

それぞれの調査先では「技」「特許」「食」「環境」をテーマとして、企業の方からやガイドさんから話をしていただき、それぞれの視点から企業について、地域について考察を深めることができました。学んだ内容は、班で共有して後半から始まる課題研究に活かしていく予定です。

実地調査に参加した生徒に対して次のアンケートを行いました。

質問項目

1. 今回の企業等の調査は興味・関心をもつことができましたか
2. 今回の企業等の調査は新しい考え方や視点が学べるものでしたか



以下は、それぞれの企業等での実地調査の活動報告と生徒のレポートを集約したものになります。

場 所：ホーコス株式会社 本社・本社工場（広島県福山市草戸町 2-24-20）

参加者：生徒 39 名，引率教員 2 名

実施内容

（1）挨拶・会社説明

本社厚生棟 2 階において、会社代表の方からご挨拶をいただきました。挨拶の中で、ホーコスが世界に誇れる機械を作っていることや今回の調査を通して、機械がどのような形で出来上がっているのかを見てほしいとのお話をいただきました。

次に社員の方から、「ホーコスの歴史や社名の由来」「景気の波に左右されないように、事業を 3 本化し、日本と海外で事業を展開していること」「技術改革の波についていけるように企業努力をしていること」についてご説明いただきました。これらの話を通して、生徒たちは、日本や世界でトップクラスの出荷額を誇るホーコスの概要について学



ぶことができたようです。

(2) 工場見学

4 グループに分かれ本社工場を見学させていただきました。工作機械を作るための、部品加工や検査の様子、塗装、組み立てなど、機械が出来上がるまでの様々な工程を見させていただきました。見学の終盤には、2台のマシニングセンタが実際に材料を加工する様子を見させていただきました。1台目のマシニングセンタは材料に穴をあけるための機械でした。生徒達は、MQLの技術を実際に見ることで、加工の速さや、正確さを実感できたようです。2台目のマシニングセンタは平面加工をする機械でした。金属の切子がマシンの中を舞う様子を目にして、生徒達からは感嘆の声が聞かれました。実際にマシニングセンタが加工をする様子を見ることができて、生徒達は、ホーコスが持っている技術力を実感できました。

(3) 質疑応答

企業調査の最後として質疑応答の時間を設けていただきました。生徒達からは「長い加工ラインの出荷方法」「加工ラインの出荷額」「円高やイギリスのEU離脱が会社に与える影響」「材料が変形しないための20度の部屋の温度設定の理由」「特許の取得数」「MQLによる冷却とモータの冷却について」の質問があり、それぞれの質問に丁寧に答えていただきました。

今回の、企業調査を通して、生徒たちは、工作機械が出来上がっていく過程や、ホーコスが持つ技術力の高さ、日本や世界に信頼される付加価値の高い製品を作り続けるホーコスについて学ぶことができたようです。



〔生徒の感想〕

○私は今回ホーコスさんを調査して、社員さん一人一人の意識の高さがすごいなと思いました。正直私は機械については大まかしかわかりませんでした。ですが、工場にある機械一つ一つ説明して下さった社員さんの知識の豊富さにとても感心しました。“仕事をする”というのは指示に従ってただやみくもに働くというのではなく自分の持っている知識を活かし自分が役に立っているところで働くということだと感じました。私は将来は自分が役に立てる仕事に就きたいです。また、そのために役に立てるように勉強して知識などを身に着けたいと思いました。ホーコスさんは私の家からとても近いということを知り驚きました。普通の田舎だと思っていた地域に海外にも展開しているようなすごい企業があることを知ることができてうれしかったです。

○ホーコスを調査して、ホーコスについてまた、「技」についての知識を深めることができました。話を聞くだけでは得ることのできない深い理解を実際に工場を見学させていただくことですることができました。工場を見学させていただく中で、品質を管理するための工夫が印象に残っています。1000分の1mmまで精度を目指していることにまず驚きました。ここまでの高い精度が求められる仕事、そしてそれを実際に行えるホーコスの姿から「技」というものを極めた職業のかっこよさを感じることができました。そのほかの工夫でも工場の室温管理や、 μm の単位で検査する社員の方からは技という道を探求することとはどういうことかを姿から感じることができました。普段私たちが日常的に何も考えずに使っ

ているものの一つ一つにこんなたくさんの人による技が詰まっているということを時間することができたと同時に「技」が生活を支えていることを強く感じました。また、「技」から話はそれてしまいますが、機械のにおいていっばいの工場内で唯一違う雰囲気だったのが「知的財産室」という部屋で、とても印象に残っています。「特許」に関係している場所でしたが、これからは「技」や「特許」を独立させて考えるのではなく、関連づけて考えることが大切であり、必要なことなんだと学ぶことができました。

○福山にもこんな技術をもったすごい企業があることを改めて感じさせられました。学校へ来ていただいた時にもさまざまな説明をしていただきましたが、やはり現場で機械が動いているのを見ると、もっと良さやすごさが分かりました。工場ではより良い品をよい状態で届けるための工夫がされていることが分かりました。そして何より、案内して下さる社員の方が生き生きしてとても楽しそうで、そこから一番「いい会社なんだな」と思いました。

○5月に講演もあったのでホーコスのことは少しわかっているつもりでしたが、製品の送り先が想像以上に広範囲であることにとても驚きました。私たちはまだ福山市から出ることはまれにしかないので、ホーコスさんは福山から世界各地に市場を広げ活躍している企業でした。そこで私が学んだことは、可能性は決して一つではないということです。「人生何が成功するかわからない」というのはよく言われることですが、既存の製品すら疑ってかかり、より上を目指していくスタンスがホーコスさんにはありました。しかし、それだけではなく、その後ろに秘めた「優しさ」があることにとても考えさせられました。人に対する優しさから、製品やサービスを生み出す。私もそのような人になりたいと思いました。

場 所：天野実業株式会社 岡山工場第2プラント(岡山県浅口郡里庄町里見 2751 番地 1)

参加者：生徒 37 名，引率教員 2 名

実施内容

天野実業株式会社への企業調査では、里庄町にある岡山工場第2プラントを訪れました。はじめに、会社の沿革や天野実業の技術について、DVDを視聴し、会社の概要を学びました。フリーズドライの技術で有名な天野実業ですが、フリーズドライに限らず、さまざまな乾燥食品を研究・製造されていること、包装技術についても改良を重ね、レトルト食品や流動食の分野への進出とあわせて、宇宙食などにも関わっていることなどを説明していただきました。



その後、2つのグループに分かれ、工場の見学と、畠中管理本部長による説明を受けました。工場見学では、フリーズドライ味噌汁の製造過程を、調理、凍結、乾燥、包装の各段階での工程や工夫について説明しながら見学させていただきました。調理の過程では、現在販売されている 200

種もの味噌汁製品にあわせた具材の加工が行われていること、トレイの中への具材投入は人が行い、偏りを防ぐために具材の向きなどにも気をつけていることなど、よりよい製品を製造するための努力を見ることができました。また、吸湿や劣化を防ぐため、3層構造からなる包装材を開発するなど、フリーズドライ以外のところにも多くの工夫が取り入れられていることを説明していただきました。



畠中管理本部長からは、カップヌードルに入っているフリーズドライのエビが天野実業でつくられたことなど、天野実業とフリーズドライが発展してきたエピソードをお話いただき、その後、フリーズドライの原理について動画を見ながら説明していただきました。

最後に質疑応答があり、省人化できる工程を増やすことはできないのでしょうか、といった建設的な意見が出るなど、生徒にとって、工夫やアイデアを考えるきっかけとなる体験になったようです。

〔生徒の感想〕

○今回、天野実業を調査させていただいて、食品加工技術について詳しく学びました。天野実業では、「技術力」と「研究開発力」に力を入れて日々食品加工をされているそうです。説明を伺っていると、理科で出てくる“伝導”とか“輻射熱”，さらにフリーズドライに直接関わってくる“昇華”という言葉などをたくさん使ってもらっちゃって、今私たちが学んでいることがこういう所に生かされているんだなと改めて感じました。フリーズドライは1890年にまで起源がさかのぼり、様々な研究を経て今に至っています。植物学として凍結乾燥の技術開発がスタートし、血液製剤という形で利用される時期もありました。そして今、一般食に利用されるようになったそうです。同じ凍結乾燥の技術が色々な場面で形を変えながら応用されているのはすごいことだと思います。このように、同じ技術をあらゆる場面で、あらゆる形で利用することの事例は他にもあると思うので、調べてみたいと思いました。

天野実業は「おみそ汁」という印象が強かったけれど、他にもたくさんの商品を作られていて、安全性やおいしさ、お客様のことを第一に考えられているという姿勢を学びました。とても充実した調査でした。

○天野実業にはフリーズドライ以外にも7つの食品加工技術があることに驚いた。その全てが消費者の多様なニーズに対応できていた。そのニーズに追いついていける技術力に感心した。有名なフリーズドライ食品は、僕も何度も食べたことがある。あまり安くはないが、人の手間や時間、エネルギーがたくさん使われていると知って納得した。ただ、社会科学で学習した「スケール・メリット」の仕組みを利用して、全長約25mもある真空凍結乾燥機（1回8万8000食分）に3億円（1台あたり）投資し、できるだけ安く消費者に提供しようとしているのだろうと思った。天野実業はフリーズドライ技術を獲得した結果、成功することができたがこれから先がどのような戦略やっていくのか気になる。大きく戦略を変えて成功した会社を他にも探してみたい。

○天野実業さんは、素材の美味しさ、栄養をそのまま届けるフリーズドライの技術を持っていました。今回の実地調査では、実際に作っている工場を見学させていただいたり、お話を伺ったりすることによって、この“技”について知ることができました。まず印象に残ったのが、1つの商品を作るのにかける時間がとても長いということです。およそ1週間かかるそうです。作業1つひとつにじっくり時間をかけて行っていました。また、たくさんの設備が揃っているのに加えて、人の手による“技”もあることが分かりました。具材を入れる順序やタイミングは、具の広がりや食感、色を見ながら調整し、温度管理も具材や状態を確認しながら人の手によって行われ、水分も蒸発する量を見て調整を行っているそうです。機械だけに頼らず、人の手を加えているところもこだわっている部分なのではないかと思いました。(途中略)実際に天野実業さんのおみそ汁を試食させていただきました。なすの食感もしっかり残っていたし、作り立てのようなみその風味が残っていて、とてもおいしかったです。確かにこだわっているのだと実感しました。(途中略)天野実業さんは、“フリーズドライ”の技で有名なことが分かりました。温度や具材にもしっかりこだわって、「機械+人の手」で商品を生産しています。私はこのような身近な企業の戦略についてもっと知りたいと思いました。実際に使っているものや口にしてしているもののこだわりを知るのがとても面白かったし、是非他にも色々なことを知りたいと思いました。

場 所：株式会社エフピコ 福山リサイクル工場

参加者：生徒 39 名，引率教員 2 名

実施内容

福山市箕沖町にある株式会社エフピコ福山リサイクルセンターを調査しました。

始めに、会社の概要や沿革についてお話をいただきました。かつては同業者が多く存在していた食品トレー業界において、本業一筋に専念し、ヒット商品の開発を続けてきたからこそ生き残れたそうです。リサイクル事業は当初なかなか理解が得られず、砂漠に水を撒くような思いばかりであったが、それでもスーパーなどの現場に何度も足を運び



んでニーズをすくい上げたり、工場の内部を見てもらって理解を得たりと、直接顧客や消費者と対話を続けることで、次第に回収が軌道に乗っていったことも語っていただきました。また、障がい者の雇用にも積極的に取り組んでいるとのことでした。実際に福山リサイクル工場でも多くの障がい者の方が、厳しい訓練を経て、回収したトレーの分別作業に従事されていました。

次に工場内部を見せていただきました。工場では、分別が十分ではない回収トレーが機械や手作業で非常に効率よく分別されていました。大きな袋に入れられた食品トレーが山のように積み上げられていましたが、そこまで臭いはきつくありません。日本では、多くの人がきれいにトレーを洗って出してくれるからだそうです。このようなリサイクルが成り立つのは日本だけだとも

おっしゃっていました。海外から視察があった時に、なぜここまできれいな状態で回収ができるのかと驚いておられたとのこと。それでも、分別はまだまだ不十分であり、分別ができていない容器は引き取らないようにしたり、「発泡スチロール製トレーは、爪楊枝が刺さる！手で割れる！」「リサイクルできないトレーは、納豆！しめじ！即席めん！」と地道に周知活動をしたりすることで工場での分別の効率を少しでも上げるように努力をしているそうです。生徒たちは、従業員の方が手際よく仕分けをする様子や、大量のトレーが様々な形のコンベヤーで高速で分別されていく様子に、興味深そうに見入っていました。

エフピコ福山リサイクル工場を見学した後、近くにある中国電力のメガソーラー発電所に立ち寄りしました。マツダスタジアム 2 個分の広さという広大な太陽光パネルを見学用展望台から見渡すことができました。



〔生徒の感想〕

○今回の企業調査でエフピコさんの企業努力を学ぶことができました。以前のホーコスさんのお話で学んだ“時代のニーズに応え、今していることを発展させていくことの大切さ”を再度学ぶこともできました。今回お話しくださった「いち早く環境に目をつけトレーを回収し再利用し始めたこと、海外からとても高価な機械を買い、再利用できるものの幅の拡大を行ったこと、お店の人やお客さんの求めるトレーを作ること」、それら全てをより良い製品にするために日々進歩していることにつながっていると思います。それらを行うためには、商品を使うお客様や販売する店員さんなど、それに携わる人の意見をきちんと聞くことが非常に重要なのだと感じました。自分の頭で考えるだけでは、1つの考えて偏ってしまったりすることもあります。たくさんの人の意見を聞くことで様々な視点から考えられるようになり、人々が求めているものが見えてきます。「昔トレーは全て捨てていた。」と聞いた時は驚きましたが、今の自分の生活を振り返ってみると、使い終えたほとんどのものを捨てています。リサイクルなどはとても大切だと分かってはいても、行動はできていないことに気づきました。なので身近なもののリサイクル方法を調べたいと思いました。

○小学生のころに社会見学でエフピコに行ったことがあり、どんなことをしているか多少知ってはいたのですが、新たに学んだことも多くありました。まず、エフピコで案内してくださった方の話で、時代とともに製品を変化させていること、現代社会の授業でも学びましたが消費者のニーズに応えることが企業において大切だということ、実例をみて学ぶことができたと思います。また、それぞれのトレー、ボトル等の種類によってリサイクルの方法がだいぶ違っていることを知りました。どの行程においても、様々な複雑な機械、多くの人の手を使って作業が行われており、特に不純物の除去、素材の識別など新たに作りかえる製品に影響を及ぼすことは徹底してあると思いました。

エフピコの事業について話を聞いたり、見学したりすることで、多くのことを学ぶことができたと思うのですが、私が何より印象に残っているのは、企業の方のお話です。このエフピコを大きくするための工夫や苦労を話してくださいました。きれいなトレーを回収するために汚いトレーが入っているものは送り返す、出向いて声かけをするといったものでした。やはり大きくなっている企業は、それぞれの工夫や苦労があるものだなと思います。他の企業のそういったことについても知りたいと思いました。

○エフピコは食品トレーを回収し、リサイクルしているというのは知っていたけれど、その過程で様々な問題が生じ、解決してきたというのは初めて知った。リサイクルが根付いていなかった日本の社会で、一人ひとりにトレーを回収するという今では当たり前のことを説得していくのは、大変な苦労があったと思う。しかし、エフピコは紙でもネットでもなく口で直接人と向き合い活動してきた。だから、“現場に行かなければならない”という言葉が一番心に残った。今の社会で忘れられていることではないかと思った。これからは、時代の変化に合わせて形態を変えてきた企業や、生き残ることができた企業の特徴を調べていきたい。

○“他の企業にはない技術をたくさん持っているが、それは他の企業にもできたことで、ただ現場に行って現場の声をきく（知る）ということに怠っていただけだ”とおっしゃっていたのが印象的だった。しかし、人々のニーズを正確に把握し、しかもそれにしっかり答えながら、環境に優しい製品を作るのは難しいことだと思うが、それを実際に何個もの製品でやっているのがすごいと思う。企業が激しい競争に勝つには、人々のニーズに応えなければならない。そこでニーズに応えるには、豊富な知識、応用力、柔軟性などが必要になると思うので、それを身につけられるようにしたいと思った。また、トレーの再利用によって環境への悪影響がどれほど緩和されたかを調べたいと思います。

場 所： 鞆の浦（対潮楼・鞆の浦歴史民俗資料館および地元産業）

参加者： 生徒 40 名， 引率教員 2 名

○実施内容

鞆の浦の現地調査では、福禅寺・対潮楼を調査した後、2つのグループに分かれ、ガイドさんの案内のもとで地元産業および歴史的建造物（旧魚屋萬蔵宅、常夜燈、岡本亀太郎本店、太田家住宅）を調査しました。また、鞆の浦歴史民俗資料館にも訪問し、館長さんの説明を聞きながら、鞆の浦の歴史についても理解を深めることができました。

○主な調査先とその概要

【対潮楼】

国史跡・海岸山先手福禅寺は、平安時代の天歷年間（947～957）の創建と伝えられる真言宗の寺院です。本堂に隣接する対潮楼は、江戸時代の元禄年間（1688～1704）に創建された客殿で、座敷からの海の眺めは素晴らしく、特に正徳元年（1711）には朝鮮通信使の李邦彦が「日東第一形勝（日の昇る東の国で一番の景色である）」と称賛し、のちにこの客殿を「対潮楼」と命名しました。ガイドさんの説明では、先頭に座っている生徒



の位置が一番の絶景ポイントであり、柱は絵画の額として見立ててあることから、前に出すぎてしまっは、よい景色は愛でることができないといった説明を聞くことができました。8月の暑い時期ではありましたが、心地よい海風と仙酔島や行きかう船に、しばらく誰も立つことはなく、景色に見入っていました。

【岡本亀太郎本店】

岡本亀太郎本店は、鞆の浦の名産である保命酒を造っているお店の1つです。この保命酒には、16種の薬草を使用されており、そのうちの2種の薬草は限られた人にしか知らされていなかったそうです。ガイドさんからは、当時この地で薬酒造っていた職人が、14種の薬草を使用して造ったものが養命酒であるといった説明をいただきました。また、お店の方からは、保命酒はペリー来航の際に幕府が献上したお酒であり、その歴史や味についての説明をしていただきました。



【鞆の浦歴史民俗資料館】

鞆の浦の町が一望できる高台に位置した資料館では、館長さんから様々な展示物だけでなく、鞆の浦で行われている祭りやイベントの説明を受けました。その中でも「茅の輪」をくぐると無病息災で過ごせるといった話を聞いて、実際に何人もの生徒たちが館長さんの教えてくださった順路に従って八の字に茅の輪をくぐるといった体験もできました。



【まとめ】

実地調査を通して、地元で活躍するボランティアガイドの方の熱意を肌で感じる事ができただけでなく、鞆の浦の歴史や地元産業の素晴らしさを学ぶことができました。また、実地調査中は多くの観光客を目にすることができ、地元のよさを再発見するよい機会になりました。



〔生徒の感想〕

- 僕は今回、特定の企業ではなく鞆の浦の様々な場所を調査した。福山近辺であるにも関わらず、こんなにも昔の街並みが残っていることに驚いた。そういった現在に残る昔の文化を自分の目で見て感じる事によって、現在の技術との共通点や相違点を知ることができたような気がする。また、現在の発達した技術の中でも、保命酒のような伝統工業が昔の技術のままあり続けているのを見て、過去の技術だからと思っはいけない。昔の文化、技術からも学ぶべきことはたくさんあり、鞆の浦のような昔の街並みを保存して現在に残す取り組みは大切だと感じたので、他のそういった地域（美観地区など）についても調べてみたいと思った。
- 「食コース」として鞆の浦を調査しました。しかし今回、「伝統ある古い街並みの残る港町」としてとても惹かれました。「対潮楼」では、瀬戸内海を臨む絶景に心奪われ、それはまさにほんとうに額縁からいる絵のようでした。（ガイドの方から）案内されている道中に見える古い家や建物。その中には比較的新しいものもありますが、景観を考えて、それらも瓦のある日本家屋で建てられているそうです。鞆の浦は、古くから「潮待ちの港」として栄えたところで、古い土壁の続く路地や情緒ある家並み、昔の土蔵などがそのまま残っています。そんな古い町並みや大正モダンな建物が立ち並んだ町並みは美しい瀬戸内の鞆の風景と相まってとても素晴らしいです。歴史ある継承されてきた鞆の浦の文化や習慣を次世代に継ぐ必要があると改めて感じられました。

○今回、初めて鞆の浦に行ったが、とても景観が良く、いい所だった。特に、対潮楼での景色が絶品だった。また、それだけでなく、景色によって、陽の出る位置と柱が一直線になるように作られていて、すごいと思った。でも、せっかくの絶景が前から見過ぎると、県道が入って残念だった。道路ができて便利にはなっただけだが、その代償に景観を損なった。便利さか自然かどちらもバランス良く取り入れることは難しいなと思った。今、鞆の浦では過疎が問題となっている。中心部から離れているので不便だけど、景観や保命酒など魅力はたくさんあるので、どうにか活かせるのではないかなと思った。

○今回の鞆の浦調査では、港町として栄えた鞆の浦の歴史について学ぶことができました。特に学んだことは、保命酒についてです。保命酒は、江戸時代から醸造されている薬味酒で万病と長寿に効くと全国で有名になりました。今回の見学では、保命酒を醸造している蔵や歴史資料館での醸造の資料などを見て、保命酒の歴史や醸造の工夫が学びました。特に、実際に使われていた樽は、とっても大きくて木でできているけど、ガッチリしていて、コンクリートなどがなかった時代の工夫を見られました。他にも坂本龍馬、三篠実業のゆかりの地ということを知った時はびっくりしました。これほど有名な人が訪れるほど、当時の鞆の浦は商業で栄えていたのだと思いました。

○鞆の浦の歴史や文化を主に学ぶことができました。特に一番はじめに行った対潮楼はそこからの眺めが印象的で、より心に残っています。その建物の構造はとても上手く計算されており、暦の役割も果たせるそうです。江戸時代に描かれた設計図も展示されており、そこからは緻密な設計がよく分かります。また、ここは朝鮮通信使とも大きく関わりがあるそうで、従事官の李邦彦から「日東第一形勝（朝鮮より東で一番美しい景勝地）」と賞賛されたそうです。最後に行った歴史民俗博物館では、鞆の浦の伝統的な文化から、最近のドラマの舞台地としての側面まで、幅広く知ることができました。鯛しばり漁や祭りや八朔の馬出しなど特徴的な鞆の文化がどれも昭和までで廃れてしまったという事実は少し残念でしたが、是非これからも伝えてほしい文化だと思いました。今回の調査では実際に町を歩くことで感じられる雰囲気など、様々な学べるがありました。しかし、テーマである「食」についてあまり深く触れなかったのは残念です。また、同時に深刻な高齢化という鞆が抱える問題についても知ることができました。風情ある街並みはとても素敵であるし、観光スポットとしても注目を浴びているので残していきたいですが、それゆえ細い道などは不便な生活をうみ出しています。そこについて調べていきたいです。

場 所：ヒロボー株式会社 ライブファクトリー（広島県府中市桜が丘三丁目 3-1）

参加者：生徒 40 名，引率教員 2 名

実施内容

ヒロボー株式会社への企業調査では、府中市桜が丘にあるヒロボーライブファクトリーを訪れました。初めに、NHKの『プロジェクトX』で、産業用ヘリコプターの開発についてヒロボーが取り上げられた回の動画を視聴しました。その後、松坂晃太郎社長から会社の沿革や、経営者として会社や社員が成長するために心がけてきたこととお話ししていただきました。そして、経営基盤を確実にするため、お菓子の容器などのプラスチック事業や電源装置事業を展開していることとお話ししていただきました。



また、社員一丸となって行う「山陽道 100 km ありがとうウォーク」の実践について、興味深いお話をいただきました。

その後、2つのグループに分かれ、航空機の模型や実際のホビー用ラジコンヘリ、産業用ヘリの展示物などを見学させていただきました。農薬散布用ヘリの開発が農家の負担を大幅に軽減したこと、ドローンによる輸血用の血液搬送技術の開発が昨今謳われているが、その数十年前からラジコンヘリによるその技術開発を行い、その役割を担える製品をすでに開発していること、環境にも配慮して、エンジンからモータのラジコンヘリコプターにシフトさせていることなど、社会や人のためになることを考えて、時代に合わせて技術開発をしていることを説明いただきました。

松坂社長の講話の中にあつた「人々の笑顔を追い求めてきたことが企業の成長につながった。」「失敗から学ぶことができる。」「夢を語り続ける・自ら行動する」といった言葉がとても印象的でした。今回の調査を通して、生徒は多くのことを学ぶことができました。



〔生徒の感想〕

○ヒロボはヘリコプターを設計している会社だと思っていたので、お菓子の容器や電源装置をつくっていると聞いて驚いた。ヒロボの今の社長の松坂さんがヒロボの経営を託された時、第一次オイルショックなどの影響で不況の真っ只中で、倒産寸前だったそうだ。そんな中でも、「不安よりやってやるという気持ちの方が強かった」と言っていた松坂さんは本当に強い人だと思った。松坂さんはずっと「社員が面白いと思える仕事をさせたい」と思っていて、それが夢だったそうだ。そのためには「チームワークが大切だ」と考え始めたのが、100kmウォーク。この取組により売り上げは上がり、職場の雰囲気も格段に良くなったのだそうだ。私は仕事をやっていく上で、チームワークや、職場全体が同じ目標に向かって働いていくことの大切さをここから学んだ。学校内でもグループの中の一人がただ要望を言うだけではだれもついてきてはくれない。みんながどれだけやる気があるのかを試し、他の意見もしっかり取り入れることが必要だと思った。

○HIROBO という会社について、全く知らなかったが、その沿革を聞いて努力と工夫によって成功してきた企業だと分かった。時代の流れに合わせて事業を多角化させてきた訳だが、業種を変える際に大変だったこと（資金面や社員、土地確保等）を具体的に知りたいと思った。また、失敗作もあるそうでそのような失敗にもめげずにいろいろ挑戦してきたのはすごいと思ったし、企業を発展させ続けるにはそれが必要なのだとよく分かった。今回の実地調査では、今まで頭では分かっていた企業の努力と、失敗と成功を心から理解することができた。今後の学

習に活かせると思う。

○これからの企業の在り方について、とてもよく学べたと思う。特に、ヒロボーの血液輸送ヘリコプターの話を知り、利益、企業の利潤だけを求めるのではなく、社会に貢献できる技術、新しいものを生み出す為の情熱を追求していくその姿勢が、今まで聞いたどの会社の指針よりも心に残った。また、100 kmを団体で歩く行事や、昔のヒロボーが女工さんの為の高等学校を運営していた事を踏まえて、世界で活躍する大企業でありながら、社員の方や地域の人々にも愛されるための企業の在り方を学んだ。

○今回の調査で印象に残っているのは、会社の方が話して下さった失敗談です。そして、その失敗をいい方向へつなげることができる社内の雰囲気や、社員の意欲を育てていることがすごいと思った。誰でも最初からうまくいっている訳ではないし、大事なものは失敗した次に何をやるかを考えることができるかだと思った。最後に「夢を語り続ける」と言われていた。何事も目標なく動くことはできないし、社員に動いてもらうこともできない。自分も夢をもち、それを自信をもって語れるようになりたい。

○ヒロボーさんは、安定した高機能のヘリコプターを製造できる技術力だけでなく、それを売り出したり、開発したりすることができる社員の方々のモチベーションを高めるための経営方針に目を見張るものがありました。はじめは、銀行から融資を得るために参加した100 kmウォークが融資以外でも功を奏したという話が印象的でした。企業の活動を支えるのは、そこに勤める社員で、その社員自身の団結や協調性が磨かれていないといい会社運営はできないという企業理念も垣間見えました。モノ中心ではなく、ヒト主体のという考え方に深く共感しました。